



板谷波山と有田

ろくろ師深海(橋口)三次郎



陶芸家として初めて芸術院賞を受賞されたのは、茨城県出身の板谷波山さんです。彼は明治5年(1872)茨城県下館市に生まれました。生家は醤油醸造業を営む旧家で本名は嘉七。父善吉は半癡と号して風流を愛し南画を描いた人で、母宇多子との間の三男として生まれました。

明治23年(1890)、東京美術学校に入学。同27年東京美術学校彫刻科を卒業しています。同29年、石川県立工業学校木彫科主任教諭として金沢に赴任しましたが、同31年に木彫科が廃止となったため辞職を決議したものの、校長の要望で陶磁器科を担当することになりました。6年後に退職するまでの間、焼物の研究に没頭したと言われています。同36年、東京高等工業学校窯業科の嘱託となり、東京田端に住居、工房を作り転居しました。このころより故郷の筑波山にちなんで「波山」の号を使用するようになったといわれます。

板谷波山記念館のHPには翌37年、波山の工房のろくろ職人として、有田出身の深海三次郎さんの名が出てきます。

過日、香蘭社を介して横浜在住の橋口彰人さんから「曾祖父が橋口三次郎といい、波山の工房でろくろ師をしていたが、有田に何か資料が残っていないか」との問い合わせがあ



明治38年東京田端で撮影された深海(橋口)三次郎さん(左側)

りました。そこで『肥前陶磁史考』を紐解くと深海家の系図の中に「虎三郎の三男」として三次郎さんの名前があり、橋口家に養子にいて大正14年(1925)3月20日に61歳で亡くなったとありました。その人物像として「泉山の窯焼きにて、宗傳の傍系深海虎三郎の三男である。嘗て有田工業学校の教師たりしが、後年東京高等工業学校又は支那福建省工業学校に教鞭を執りしことがあった」とあります。

また、明治35年(1902)、ロシアのウラジオストック近隣のガンゴザに於いて、製陶を起業するということで、有田から窯方や細工人として泉山の江上房五郎さんや橋口(深海)三次郎さんらがロシアへ渡航したとあります。実はこの折の製品は町内の江原家より当館に寄贈されていますが、この事業は日露国交があやしくなってきたということで、翌36年(1903)の11月には全員が引き上げてきたということでした。

ということであれば、深海(橋口)三次郎さんはロシアから帰国後に上京して板谷波山の窯でろくろを担当し、波山のもとを去ったあとに、当時の東京高等工業学校や中国・福建省工業学校で教鞭をとったものと思われる。

9月には橋口さんご夫妻が横浜から来館され、曾祖父にあたる三次郎さんが写った貴重なアルバムを持参していただきましたが、それには両校関係者と一緒に写った写真もありました。

明治期の窯焼きで細工人としても名高い深海平左衛門・墨之助、竹治親子の写真は現在においても不明ですが、深海宗傳の流れをくむ三次郎さんを拝見しながら、同じDNAを持つ深海一族ということで、明治期の有田に思いを馳せたところです。(尾崎 葉子)

皿 季刊 山

No.112

冬
2016

有田町歴史民俗資料館・館報

有田異人館の お披露目会を行いました



有田町教育委員会では、平成26年度から佐賀県重要文化財・有田異人館の復原保存修理工事に取り組んできましたが、このほど修理を終え、建築当初の明治9年（1876）の姿によみがえりました。

建物は、木造2階建てで、アーチ形の窓やステンドグラスなど外観は洋風ながら、内部は畳敷きで壁面や天井全体を和紙で覆うなど、和洋折衷の造りとなっています。



天井と壁に貼られた和紙

17世紀後半より世界の中核的磁器産地として繁栄した有田も、オランダ東インド会社による宝暦7年（1757）の積み荷を最後に、いったん公的な海外貿易が途絶えてしまいます。それからおよそ1世紀、久富与次兵衛が佐賀藩から一手販売を許された天保12年（1841）を端緒として、ウィーンやフィラデルフィアをはじめとする万国博覧会で脚光を浴びるなど、幕末・明治期を舞台とした、華々しい海外輸出時代の第2幕が開きました。



田代助作さん

久富家の一手販売を継承した田代紋左衛門は、横浜と長崎に田代屋を構え、絶大な信用を得て米国や英国に販路を拡大しました。また、その長男の助作も中国市場を開拓するなど、海外貿易を積極的に押し進めました。こうした時代背

景の中で、助作が西洋人の宿泊や接待のため建てたのが、田代家で西洋館と称した異人館でした。

保存修理工事を終えた直後の10月29日(土)～11月6日(日)までの9日間、期間を限定して、建物のお披露目会を開催しました。館内では、十四代今泉今右衛門さんや井上萬二さん、十五代酒井田柿右衛門さんら有田陶芸協会作家の花器を用い、今、注目のフラワーアーティストであるニコライ バーグマン氏監修の「花と陶芸のコラボ展」が催され、華やかで幻想的な空間を堪能していただきました。期間を通じて、延べ約1900人の皆様にお越しいただきました。



二階に展示された花々

初日は、文化財課主催で午前中に設計監理者の松尾光一氏を中心に現地説明会を開催し、午後は会場を近くの白川公民館に移して、修理工事の監修者の熊本大学・伊東龍一教授に基調講演をお願いし、その後、修理活用検討委員の元近畿大学・工藤卓氏や松尾氏らとの座談会を開催しました（現地説明会のみ、11月5日も開催）。

お披露目会が終わると、一旦閉館して、来年4月から本格的に一般公開を行う予定ですが、それまでに以前敷地内にあった蔵を復元して、トイレなどの便益施設を設けるため新たな工事を始めています。それと併行して異人館の展示準備に入っていくこととなります。

今後、異人館を有田町内外の方々に利用していただくことで、さらに有田の魅力を際立たせることができるものと思っています。（池田 孝）

有田の群像 I

～有田の400年を紡いだ人々～

平成28年 **12月18日(日)**まで開催中

【開館時間】9:00～16:30

【会場】有田町歴史民俗資料館(東館)

入館料
無料

今年是有田焼創業400年です。この400年という気の遠くなるような時間の中で、有田に生きた、あるいは有田に深く関わった人々が有田に与えた影響、功績など各地の博物館や個人の方からご提供いただいたさまざまな資料で紹介しています。下記はその一部です。



豊臣秀吉画像
(1537～1598)

佐賀県立名護屋城博物館所蔵資料

天正13年(1585)、関白任官直後に対外出兵の意志を明らかにした。九州、関東、奥州を平定し統一を完了すると大陸出兵計画を具体化していった。もし秀吉の野望による陶工の渡海がなければ、あるいは有田の泉山陶石の発見はなかったか、あるいは発見まで時間を要したのかも知れない。



佐賀藩祖 鍋島直茂像
(1538～1618)

公益財団法人鍋島報効会所蔵

鍋島清房の次男として生まれた。慶長12年(1607)龍造寺政家、高房の死後、多布施に隠居し、家督を勝茂に譲った。「鍋島直茂公譜考補」には「公御帰朝ノ時、日本ノ宝二可被成トアリテ、焼物上手ニスル者六、七人被召置焼物ス」とある。



多久安順(たぐやすとし)画像
(1563～1641)

多久市郷土資料館所蔵

文禄元年(1592)の朝鮮出兵の折には、800余の兵を率いて朝鮮に渡った。さらに慶長の役でも17歳の勝茂に従い再び出兵した。妻は鍋島直茂の娘で勝茂の姉・千鶴。佐賀藩の請役家老として藩主を補佐した。初代金ヶ江三兵衛は朝鮮から連れて来られてからしばらくは、この多久長門守安順に仕え、その後有田に移り住んでいる。



南遊記行

奥島正就家所蔵

平戸藩150石の中級家臣であった奥島家に伝わる文書。作者である奥嶋六郎太夫景就の「南遊記行」は享和2年(1802)熊本での剣・鐘修行に赴いた折の旅日記。有田を通った際には町中の様子や泉山のことなどを記し、また泉山を描いた図としては、現在のところ最古のものであり、町中の様子は文政の大火(1828)以前の様子を記している。



御用木札

山本大介家所蔵

「御用細工場二付細工人外出入無用之事 元治二年(1865)丑五月会所」と墨書されている。

山本代官であった石橋三右衛門が残した記録によれば、山本家を中心に関叟公からの注文で御所へ献納するための大燈籠を製作しており、藩主の命を受けて製作していた窯焼きであった山本家の工房への入り口に掲げられていたものと思われる。



前田正名(まえだまさな)の揮毫皿
香蘭社所蔵

前田正名(1850～1921)は元薩摩藩士で、明治期に農商務省の役人であったが下野し、全国を行脚して地域創生を唱えた。

ここ有田にも明治26年(1893)6月11日に訪れ、白川にあった勉修学舎で日本工業の変化や外国との比較、京都や瀬戸などの窯業地の実態に触れ、有田の人々の積極性を求めたといわれている。翌27年(1894)には伝統産業を重視し、外国を相手に誠実かつ有利に商売をすることを目的として全国組織の「五二会」を発足させた。

同29年(1896)2月には佐賀県陶磁器品評会の会頭に就任し、有田町の九代深川栄左衛門や田代呈一等と3月1日から品評会を開催した。この皿は有田を訪れた前田正名が香蘭社で揮毫した折のもの。



れきみん応援団 研修旅行開催

れきみん応援団が活動を始めて4年目となりました。この間、毎月の勉強会とともに、年1回は各地のボランティアとの交流や博物館などで開催されている有田焼、有田町の歴史に関する展示等を見学するための研修旅行を実施しています。

今年は有田焼創業400年にちなむ企画展として太宰府市の九州国立博物館で「古伊万里―旧家の暮らしを彩った器―」展が、佐賀市徴古館では「鍋島家伝来磁器展」が開催されていたので行って来ました。

参加者は9名でしたが、朝から好天に恵まれ絶好の旅日和となり、一路太宰府市へ。ちょうど特別展「京都高山寺と明恵上人―特別公開鳥獣戯画―」展も開催中で会場へ入るのに入場制限が行われるほどでした。

応援団の目的は4階の文化交流展示室で、そちらも



九州国立博物館前で

修学旅行生がいっぱいでしたが、京都・鹿苑寺住持の鳳林承章が綴った日記『隔莫記』の原本や、冷泉家などの器など見ごたえ十分の展示内容でした。

午後から伺った徴古館では副館長以下、学芸員の方々総出でお出迎えいただき、展示されている焼物が鍋島家でのように使われてきたかなど館内の説明を受けました。

今回の研修も、これから応援団の活動を続ける中で役立てていただけるものと思っています。

応援団のユニフォームが出来ました

れきみん応援団が活動を行う際に着用するユニフォームが出来ました。染付の色合いと一年を通して使用できるということで、ネイビーのベストとしました。背中には応援団の中村貞光さんデザインによる「ありたれきみん応援団」のロゴマークが入っています。

今後、展示解説や各種イベントなど色んな場面で活用していただければと思います。



ユニフォームを着用して来館者の説明をする応援団員



中島浩氣さん関連の資料 を寄贈いただきました

中島浩氣さんの孫である神奈川県葉山町在住の雪竹欽哉さんから、ご兄弟が保管されていたものを取りまとめて資料をご寄贈・送付していただきました。

「駄句り集」という自筆の句集や、表紙裏に「この巻の絵は孫たちのもとめにまかせその道も知らぬ八十の祖父がはばかりもなく描きなくりしものなれば、かりそめにも人に見せるものにはあらず」と但書を残された動物などの絵のほか、百科事典の様相を呈した手作りの和綴じの本、さらには文章を書くにあたって参考にされたであろう辞書などなど。これらから博覧強記の浩氣さんの姿を垣間見ることができます。

この辞書については欽哉さんの母であり浩氣さんの長女であった雪竹多枝子さんが、生前次のように語っています。「執筆の間手放さなかった辞書はバラバラになってしまい、2冊に分けて製本し直してもらって使っていた」と。文字通り「韋編三たび絶つ」を实践された浩氣さんを偲ばせる資料の数々です。

季刊『皿山』

通巻 112 号 (平成 28 年 12 月 1 日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>